

「見る」を含む学習の系統性（4）

－源氏物語「若紫」－

坂東 智子

Systematicity of Learning Including “Seeing”(4)
－ The Tale of the Genji “Wakamurasaki” －

BANDO Tomoko

(Received September 24, 2021)

1. はじめに

本研究は、国語科における言語化能力と連動する「見る」力の系統的な育成と、現行教科書教材を用いた小中高の系統性を意識した「見る」を含む授業提案を目的とする2017年からの継続研究の一環である。「現行教科書教材を用いた」という部分に、批判精神のなさが見え隠れすると自問自答しながら、研究を継続している。

古典教材ではこれまでに中高の共通教材として多く採録されている竹取物語「天の羽衣」を取り上げた¹。絵本や映像で幼いころに出会ったことのある、おそらく誰もが知っている「かぐや姫」のお話に、小中高それぞれの発達段階で、『竹取物語』として出会い直す「場」をどのように用意すればよいのか。新たな発見、創造的な出会いのために、受容の具体物である絵巻や現代語訳、そして馴染みのある絵本と現代作家が訳を担当する絵本を原作と比較するという活動を提案した。それらと対話することを通して、「見る」から「読む」へ、「読む」から「見る」へ、そこから生まれた自らの「問い」をもってまた「読む」「考える」「話す」「書く」という言語化能力と連動する授業提案を行った。授業が、各時代の受容者とは異なる、原文のものの見方や考え方があることを発見する「場」（プロセス）となることを願ったものである。その「場」（プロセス）で、原『竹取物語』の言葉、表現そのものに出会っていく。また、作品の主題や時代背景、当時の宗教観や政治的な影響といった、いわゆる社会文化的な文脈に気付いていく。作品を「時間軸」「空間軸」に位置付けて読むことで、現在の自分との繋がりや隔たりを感じたり、再確認する。そのことが自己認識や自己批判を含む認識力に培うことができるというのが、研究のねらいである。

本稿では、新学習指導要領による科目編成の変更も

あり、高校教科書での古典教材の定番化の問題も議論されているところだが、現行高校教科書「古典B」全てに採録されている²いわば高校古典の「定番中の定番教材」³である源氏物語「若紫」垣間見場面を対象とする。「若紫」垣間見場面の教科書採録状況や指摘されている問題については、章を改めて詳述する。

ここでは、本研究における2つの大きな問いとそれに対する現時点での研究仮説を述べておきたい。1つは、なぜ国語科において「見る」力の系統的な育成が必要なのかである。2つ目は、古典を学ぶことと「見る」力の系統的な育成はどのように関係するのか、そもそも古典の学習に「見る」力は必要なのかという問いについてである。もちろん、2つの問いには、「見る」力を系統的に育成することによって、国語科の授業でどのような「資質・能力」の育成を目指すのかという、より根本的な問いが通底する。

本研究の目的、立場を明確にするために改めて冒頭の研究目的をもう少し詳しく説明する。周知のことだが、新学習指導要領では、小中高いずれの校種においても、「国語に関する資質・能力の育成を目指すことを最重視する」という基本的な考えが示され、「教材ベースから資質・能力ベースの指導へ」という授業観の更新が求められている⁴。その時に「現行の教科書教材を用いた」とはどういうことか。もちろん「現行の教科書教材で」である。実現可能性の問題から「現行の教科書に採録されている教材を用いて」という提案を行っている。では「現行教科書教材を用いて」どんな資質・能力の育成をするのか。国語科において育成すべき力については、「言葉の力」「言語能力」「言語化能力」などの表現、捉えがなされている。中でも本研究では「言語化能力」を活性化させ強化すること、つまりは豊かな言語生活を

生み出す「言葉」そのものを生み出す力としての「言語化能力」の育成を目指している。「言語化能力」は浜本（2011）に拠る。「これからの国語科教育は、言語生活を豊かにするために言語体系・言語活動・言語文化を生み出していく根底にある言語化能力に働きかけ、その能力を活性化し、より強力化していくことを目標とすべきである」⁵というところの「言語化能力」である。

1つ目の問いについてはどうであろうか。

「言語化能力」を仮に「言葉そのものを生み出す力」と指定する。先行研究においても同様の指摘は行われている。鹿内（2006）は、浜本（1996）⁶、町田（2005）⁷を踏まえ、「絵図を教材にして、そこから何かを発見させたり、創造させたりすることができるなら、その絵図は、言葉を生み出していくための効果的な『場』となるであろう。⁸」と述べ、絵図を「見る」ことから発見や創造を導いていく授業を試み、授業記録の分析から、三段階の「見る」を活用する方法を取り出し提案している。①発見や創造を引き出しうる絵図を選定する。②新しい意味の発見は、絵図を構成する「部分に注意を払う」方法によって行う。③新しい意味の創造は、絵図を構成する各部分を関連づけて物語をつくるという方法によって行う⁹。この「全体を見る」⇒「部分を見る」⇒「部分と部分の関係を見る」という方略は、筆者が先行研究を基に試案¹⁰として提案する「見る」方略レベルⅠ～Ⅲに相当する。さらには、「各部分を関係づける」活動としての物語化の有効性を検証しており、本研究にとって示唆に富むものである。また、「言葉を生み出していく」効果的な「場」づくりは、国語科授業づくりの中核を担い、小中高大いづれの校種の教員にとっても須要のものであり本研究の仮説と重なる部分が多い。違いは、本研究では、「言葉を生み出していく」力を育成する、つまり「言語化能力」に培うためには、「よく見る」という「見方」を知り使えるように内面化して「見る」場を設定することが必要であり、それを系統的に育成する必要があると考えていることであろう。国語科において「見る」力を系統的に育成することが、「言語化能力」を活性化し強化させるためには必要だというのが、本研究の仮説にほかならない。

次に2つ目の問い、古典を学ぶことと「見る」力の系統的な育成はどのように関係するのか、そもそも古典の学習に「見る」力は必要なのかについて述べていく。

三田村（2006）は、「いま改めて、なぜ源氏物語と絵画なのか」との問いに答えて、「補助教材としての絵画ではなく、絵画でなくては語れないものと文字によって語るものを行き来して、楽しみを増幅していきたい」¹¹と述べる。三田村のいう「楽しみを増幅する」ためには、「絵画でなくては語れないもの」を読み取る力、つまり

は「見る」力そのものを意識的系統的に育成する必要があるというのが、本研究の立場である。原文を絵等の視覚的資料（もう一人の読者の読みとその表現）と行き来させながら対話的に読むことで、物語内部の記憶だけでなく物語が内包する集合的記憶（共同的な知の記憶）のリコール（再生）の場が生成される。古典の授業が記憶のリコールの場（プロセス）となれば、「自分の経験や既知のものと関連付けて認識する」「時間軸や空間軸にテキストを位置付けて認識する」¹²といった、「社会や自分との関わりの中で」伝統的な言語文化の価値に出会う可能性が高まる。つまり、言語文化の価値を見出しそれらを継承する意識や姿勢を育む場（プロセス）としての古典授業が成立するのではないかというのが、本研究の仮説である。

2. 高校教科書「若紫」垣間見場面の採録状況と問題点

2.1 先行研究による採録状況の調査結果と教材化の史的変遷

管（2017）¹³は、『高等学校用教科書目録（平成29年度使用）』に掲載された「古典B」の教科書全19冊のうち、文英堂を除いた9社18冊¹⁴全てに『源氏物語』桐壺巻と若紫巻が採録されており、両巻の採録場面は、有馬（2006）¹⁵が調査した2006年3月時点での巻別採録状況と同場面であったと報告している。

では、いつから「若紫」垣間見場面の採録が定着したのか。教材化の史的変遷、史的状況の中での受容については、原岡（2017）¹⁶に詳しい。その論考から教材化の歴史をまとめておく。一色（2001）¹⁷の調査によると、明治期の旧制中学校教科書では、「須磨」がやや多く、昭和戦前期に至るとそれがさらに顕著になる。旧制中学、女学校ともに採録のおおよそは「須磨」に引き絞られていく。明治期から始まった「須磨」の名文鑑賞が教科書での『源氏物語』学習の中心だったという。その後、戦後昭和20年代の新制高等学校においては、「若紫」垣間見は7種類15冊の教科書に採録され最多となる。「須磨」の名文鑑賞とは一変する採録状況がはっきりと浮かび上がる。「風景から人間へ、という変換の時は戦後の所謂民主化と背中合わせである。」と原岡はいう。田坂（2012）¹⁸の調査では、2000年度の高等学校国語教科書177の内、44が北山での垣間見を中心とする場面が採録されている。

「若紫」垣間見は、明治期以降一貫して最多登場の教材であったわけではないが、現在の高等学校の教材として最も多く採録されているのが、「桐壺」巻冒頭と「若紫」垣間見場面である。

2. 2 「若紫」採録箇所の問題

それでは、どの教科書も同じ「若紫」原文箇所を採録しているのだろうか。否である。先の原岡 (2017) に採録箇所の変遷が詳しく述べられているが、本項では、現行教科書の原文採録箇所限定して、管 (2017) の調査をもとに整理した上で、本稿で対象とする原文採録箇所について、その妥当性を検討していく。

管 (2017) の調査によれば、現行「古典B」の若紫垣間見場面採録箇所は以下の5通りである。(丸数字は注14の教科書番号と同じ)¹⁹

- 「日もいと長きに～と思ふ心深う付きぬ。」(9冊)
①②③④⑤⑥⑦⑧⑬
- 「日もいと長きに～涙ぞ落つる。」(1冊)⑨
- 「日もいと長きに～帰り給ひぬ。」(6冊)⑩⑪⑭⑮⑰⑱
- 「日もいと長きに～つやつやとめでたう見ゆ。」(1冊)⑫
- 「清げなる大人二人～露の消えむとすらむ。」(1冊)⑯

17冊が「日もいと長きに」から採録を始めている。光源氏が若紫を垣間見する場所、小柴垣に移動してからの採録であるため、大部分がここから採録を始めていることは首肯できる。

問題は、どこまで採録するかであろう。本稿の考えは以下の通りである。全編を貫き繰り返されていく「形代」という物語の主要なモチーフに関わること、また若紫の登場と抱き合わせる形で進行する藤壺の物語を射程に入れつつ、何よりも名文鑑賞とは異なる人間光源氏の心理を前景化して読む学習を構想するためにはという前提で、「～と思ふ心深う付きぬ。」まで採録を適切と考えたい。管の調査でも、18冊中9冊、半数が採録している。

採録箇所の本文²⁰を具体的に辿りながら、筆者の考える妥当性の根拠をもう少しだけ丁寧に説明しておく。「～涙ぞ落つる。」までの場面では、「いとなやましげに読みたる尼君」の姿を光源氏の視線を通して描き、その後で、古典世界では描かれることがまれな、「走り来たる女子」として「十ばかり」の少女が光源氏の眼前に登場する。北山という都から離れた場所で、普段着姿の健康的な美少女の突然の登場である。「あまた見える子どもに似るべうもあらず」「ねびゆかむさまゆかしき人かな。」と否応なく惹かれ心に飛び込んできた光源氏の若紫初見の心理が描かれている。否応なく凝視してしまうのは、「いとよう似たてまつれるが、まもらるるなりけり。」だからであった。藤壺その人への思いが心の奥底深くにあることに、光源氏自身が気づき、そして「涙ぞ落つる」のである。

続く「若草と露」で明かされる「故姫君」の存在、つまり、尼君は少女の母ではなく祖母であり、実母はすでに故人となっているという、光源氏のこれも深層心理に影響を及ぼす情報提示は見逃せない。これは後で詳述する。母を亡くした少女、それも「かの人」に「いとよう似たてまつれる」少女を、「かの人」の御代はりに、明け暮れの慰めにも見ばや。」という願望が、思いが、光源氏の心の深いところに強く宿る。そこまでを描いている、「～と思ふ心深う付きぬ。」までの採録が妥当であろうと本稿が考える根拠である。

『源氏物語』全編を教科書に採録することは無い物ねだりであり、到底不可能なことは勿論承知した上で、それでも可能なかぎり、全編の流れに繋がる採録が望まれるところである。

また、「桐壺」巻採録箇所と「若紫」垣間見場面の連結については有馬 (2006) の提案もすでにあるが、本稿でも前景化したい「若紫」垣間見場面における光源氏の内なる心理を丁寧に読み取る学習を構想するのであれば、「藤壺想起の前提として、光源氏の藤壺への思慕を本文に即しておさえられる形となっている」藤壺入内の経緯を挟み込む構成を採ることが、必要な要件である。

この連結の問題については、文化、歴史の状況との関係という別の観点からの言及もある。原岡 (2017)²¹は戦前戦中期の「教育的配慮」から父帝の妃との密事を連想させる記述を教科書採録箇所から削除したという教材化の史変遷を辿った上で、現在の「美しく無垢な少女への思いと藤壺思慕とをはっきりと関係づけるための配慮」によって、教科書採録の「若紫」は、「原典を損なわぬあるべき姿を取り戻した」と評価する。その一方で、原岡が1990年代半ばから20年余勤務した女子大学において、「光源氏のような『ロリコン』が高校の教科書に出てきて良いのでしょうか」という質問をはじめて受けた時の衝撃を語っている。筆者も大学の一般教養の授業で、類似した感想を目にすることもあり、確かに「ロリコン」漫画や社会的な事件という文化状況との関わりを感じ、丁寧な説明の必要を実感する。先述した「若草と露」での若紫の亡母「故姫君」についての説明を教科書掲載の人物関係図を用いて詳しく説明する必要性を感じる所以でもある。

原岡は、「学習者は無論藤壺との相似に関して、教科書等で触れている。けれど、垣間見の構造、敬語の在り方など複雑な課題の重なる教材学習の中では、ごくあっさり藤壺に似ているという事実だけを印象づけられる経緯だったのであろう。藤壺との関わりについては、光源氏幼児期の母、祖母喪失体験に遡って丁寧に説明することではじめて「正確に理解させること」が可能なのだと田坂憲二氏によって既に詳細に説かれるところであ

る。」と先行研究を紹介している。本稿では先行研究に教えを受けながら、「ロリコン」とは明らかに異なる、亡母の面影に通じる藤壺への思いの深さを学習者が実感を伴って理解できる場としての視覚的資料の活用を提案する。

吉井（2014）²²は、「桐壺巻冒頭部分と、若紫巻のほぼ同じ場面—北山で光源氏が若き日の紫の上を垣間見る—シーンを掲載することが、どの教科書においてもまさに『固定化』している」状況になっており、これらの教材はもはや教科書から「はずせない」ものとなっているという。さらには、教科書教材を超えて、さまざまな作品を授業に取り入れ、より深化、発展させていく試みがなされている実践例もあるが、そうした取り組みができる環境にあるのは、ごく一部の教員に限られるのではないかと、「定番化」「固定化」への危惧、問題として捉える必要性を説いている。

若紫垣間見場面は、高等学校古典教材の「定番中の定番教材」であることは間違いない。教科書における古典教材の採録状況の問題、ひいては今という時代、この状況における古典教育そのものの意義については、稿を改めて考察を行う必要があると筆者も考えている。ただ、本稿では、定番教材をどう教えるかという視点ではなく、定番教材で何を、どのような資質・能力を育成するのかという視点こそ、重要なのだという立場に立って考察する。

3. 本稿で対象とする教科書

2章での先行研究の検討を踏まえ、本稿で取り上げる「古典B」教科書を、大修館書店「古典B310 古典B 古文編」とする。その主な理由は、以下の4点である。

- ①「桐壺」冒頭、「若紫」垣間見両場面を採録しており、藤壺入内の経緯を両場面の間に挟み込む構成である。
- ②「竹取物語」「天の羽衣」、『伊勢物語』「初冠」「関守」「狩りの使い」、『更級日記』「あこがれ」「源氏の五十余巻」を採録しており、『源氏物語』への影響関係など、文学史的な視点を持たせることが可能である。
- ③コラム『源氏物語』の影響を採録。『更級日記』への言及、現代語訳、絵画、映画、漫画、能など、『源氏物語』に取材した作品を多数紹介している。
- ④『源氏物語』中盤、終盤の「葵」「須磨」「薄雲」「若菜上」「御法」「橋姫」を採録。紫の上の生涯、全編を貫き繰り返されていく「形代」というモチーフ、「橋姫」の垣間見の場面が採録されており、「若紫」垣間見の場面と有機的なつながりがあり、『源氏物語』全編の流れが捉えやすい。

4. 若紫「垣間見」場面の特徴および『伊勢物語』初段の垣間見との相違

久富木原（2014）²³は、『源氏物語』の絵画を手がかりにして、若紫垣間見場面と他の源氏物語の垣間見場面を比較することで、若紫垣間見場面の物語中の位置をおさえる試みを、古典文学研究の立場から報告している。

『源氏物語』全垣間見場面の中から久富木原はそれぞれ絵画とセットにして次の6場面を取り上げ分析を行っている。（本稿では、図6～11は割愛）

- A若紫巻 光源氏が若紫とその祖母の尼君を見る（図6 「源氏物語画帖」桃山時代 土佐光吉・長次郎 京都国立博物館蔵）
- B空蟬巻 光源氏が中流の人妻・空蟬とその継娘を見る（図7 石山寺蔵四百画面 源氏物語画帖 江戸時代中期）
- C野分巻 光源氏の息子、夕霧が継母の紫の上を見る（図8 源氏絵色紙 江戸時代 愛知県立大学図書館蔵）
- D若菜上巻 光源氏の正妻・女三の宮を源氏の甥・柏木が見る（図9 源氏絵色紙 江戸時代 愛知県立大学図書館蔵）
- E竹河巻 蔵人少将が玉鬘の娘姉妹を見る（図10 復元模写国宝源氏物語絵巻）
- F橋姫巻 光源氏の息子薫（実は不義の子）が八の宮の娘姉妹を見る（図11 復元模写国宝源氏物語絵巻）

以下に久富木原の分析を筆者が簡略にまとめる。先にあげた6垣間見場面のうちB-Fは、見られている女性ははすべて成人女性である。源氏物語の主要な垣間見場面の中で、A「若紫」垣間見場面のみ、垣間見の対象は尼と少女であり、どちらも性愛の対象にはなり得ないという点で特殊であるという。

古典作品における「垣間見」場面は、男性主人公がそれをきっかけにして恋心を抱き、恋物語をスタートさせ展開させていく重要な場面として機能している。高校生であれば、教科書で既習の『伊勢物語』初段「初冠」が安易に想起されるであろう。

すでに植田（2003）²⁴によって、垣間見という設定から『伊勢物語』初段と比較しつつ影響関係を読み取り、文学史的な視点を持たせるという提案もなされている。また、古典文学研究分野では、原岡（2008）²⁵が両作品の本文を比較検討することによる詳細な報告を行っている。それに拠ると「（伊勢）初段の『女はらから』という二人組は、『若紫』において祖母尼君と孫紫の上という二人に変換されたと考えられ」、「二人を垣間見る、という趣向は実は宇治十帖の発端、『橋姫』でも繰り返される現象である。」ここから、『伊勢物語』初段、『源氏物語』「若紫」、「橋姫」というラインが浮かび

あがってくる。また、わずか10歳という少女を垣間見ること、『竹取物語』のかぐや姫にも繋がる設定である。さらに、藤壺の密通と表裏の関係にある若紫の垣間見場面は、『伊勢物語』二条后高子との禁忌の恋を想起させるものでもある。

藤本ら (2011)²⁶は、「『伊勢』の「初冠」の内容と『源氏』の若紫巻の垣間見の場面とは、深い関係を有するもので、「初冠」の知識を欠落させて若紫巻を読んだところで、本来のおもしろさの半分も味わえないであろう。」と述べ、伊勢物語から源氏物語へという各作品間の関係性に目を向けることによって、「我が国の言語文化」の「継承・発展」を高校生対象にどう指導していくかが重要である。高校での古典の授業が契機になって、真に「生涯にわたって古典に親しむ態度」が育ってほしいと記している。

代表的な古典作品の断片的な箇所を個々に学ぶのではなく、それらの箇所や作品同士を関連付け、時間の流れ、文学の流れとして、現在の学習者の時間や言語生活にも繋げられる「場」をどう用意するか。本研究では、その「場」づくりとしての視覚的資料の活用の有効性を一貫して考察し、提案していきたいと考えている。

5. 若紫「垣間見」場面の先行実践

近年の高等学校での古典授業では、『源氏物語』に限らず、挿絵や漫画、絵本や映像などの視覚的資料を活用して、古典に親しむ態度を育て、場面の理解を助け、読み取ったものを表現することを通して、深い学びを成立させるという実践が多く試みられている。

若紫「垣間見」場面に絞り、その中でも絵画的資料を活用した実践について、いくつか紹介する。

筆者の記憶では、大学での源氏絵を用いた共通教育（一般教育）の授業を計画する際に、最初に参考にしたのが田中 (1987)²⁷である。田中実践は、生徒にも光源氏と同様に垣間見をさせたいと考えて、『新潮日本古典集成 源氏物語一』の文（傍訳・頭注つき）プリントに挿絵をつけて教材とした実践である。田中は挿絵を生かした通釈活動の有効性について、「①各自主体的に、本文の通釈活動に取り組んでいける。②言葉と挿絵を照応させながら、具体的にイメージを作りあげることができる。③通釈結果を、一人一人の生徒にフィードバックできる。④通釈活動の内に、おのずと視写をさせることができる。」の4点を挙げている。筆者も視写を「見る」活動と併行して取り入れているが、言葉そのものに着目させることができ、具体的にイメージを作りあげることができるという報告に示唆を受けたところも大きい。

大学での実践ではあるが、河添 (2020)²⁸が、大学一年対象の「日本文学概論Ⅱ」全15回のうち第7回の若

紫の講義では、土佐光吉「源氏物語絵紙帖」（「源氏物語絵画帖」とも、京都国立博物館蔵）の絵と本文、現代語訳を配布し比較させて、描かれた六人の人物が誰かを答えさせる活動を行ったことと、第9回には、本研究と密に関わる「『源氏物語』『伊勢物語』の他の垣間見場面の絵解きのアクティブ・ラーニングを試みたことを報告している。ねらいは、「絵から原文テキストの構造に気づかせ、より深く理解する活動であると同時に源氏絵の歴史の変遷にも気づかせる」ことであった。

本稿のねらいとするとところと比較すると、「絵から原文テキストの構造に気づかせる」については同じ方向性であるが、「源氏絵の歴史の変遷」に気づくことが中心のねらいではない。先に4章で述べたように、伊勢物語から源氏物語へという各作品間の関係性に目を向けることによって、時間の流れ、文学の流れとして、現在の学習者の時間や言語生活にも繋がる可能性のある「場」を用意することが本研究の中心的なねらいである。「時間的、空間的」な位置をもった作品として、現在の学習者にも繋がる、そういった古典作品との出会いを用意するために、絵画的資料の活用を行うのである。

河添の報告も受けて、松岡 (2020)²⁹は「授業で高校生に伝えるべきは、これが決して原文に忠実な絵画化作品ではないということにあると考えた。」と述べている。松岡は、「教科書の活字テキストを補完する画像テキストとして新たなコンテキストに組み込まれた源氏絵（「画帖」）を、積極的に学習者の作品解釈に活かす単元を構想した。」とする。留意したのは、「学習者が文学を読む必然性および古典に関与する必然性をどこに見出せるかである。」と述べている。

河添は、「当初は新学習指導要領の『主体的・対話的で深い学び』の文言を意識していたが、実践を重ねるうちに、古典作品を通じて『深い学び』を得るというプロセスにおいて、中・高と大学の教育の根は繋がっているという実感を得た。結果としては、『主体的』とは学生の学習の前提であって、『対話的』は方法や手段、『深い学び』が目標になるという感慨である。」という。この河添の実感は、本研究を継続することにとっての、励ましも、明らかにすべき課題とも受け取れる。考察を続けていく必要がある。

5.1 若紫巻「垣間見」場面で使用する視覚的資料

大修館書店「古典B310 古典B 古文編」「若紫」には、人物関係図と若紫（梶田半古筆）の絵図が採録されている。絵は若紫ひとりの立ち姿（横向き）である。「日もいと長きに〜」から始まる原文の前に次のリード文がある。

光源氏は一二歳で元服し葵の上と結婚するが、その生活に満足せず、亡き母の面影を求めて、父帝のもとに入内した藤壺を思慕し続ける。

光源氏一八歳の春、彼は熱病にかかって苦しみ、京の北方の山に住む僧のもとにおもむいて、加持祈祷を受けた。その日の夕刻のことである。(p.110)

リード文をより実体あるものとして理解するために、最初の視覚的資料として、「平安京周辺図」³⁰を提示する。

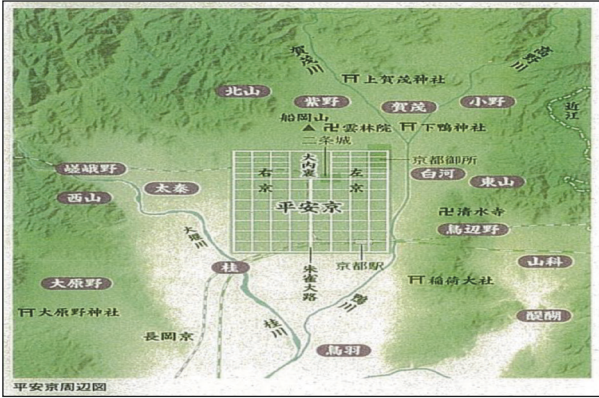


図1 平安京周辺図

北山での垣間見の後、紫の上は光源氏の自邸二条院に引き取られる。平安京から離れた場所である北山の場所を空間的に確認し、藤壺の居る内裏との距離感を捉えたい。伊勢物語にも登場する長岡京や小野の位置も確認できる。また、朱雀大路や清水寺といった地名や場所が、空間的な位置を実感させながら、現在の学習者にも確認できると考えるからである。安易な方法であるかもしれないが、このような具体的な手立てこそが、繰り返しになるが古典世界と現在を結ぶ「場」となると考えている。

次に、教科書に掲載の「若紫」人物関係図³¹を提示する。

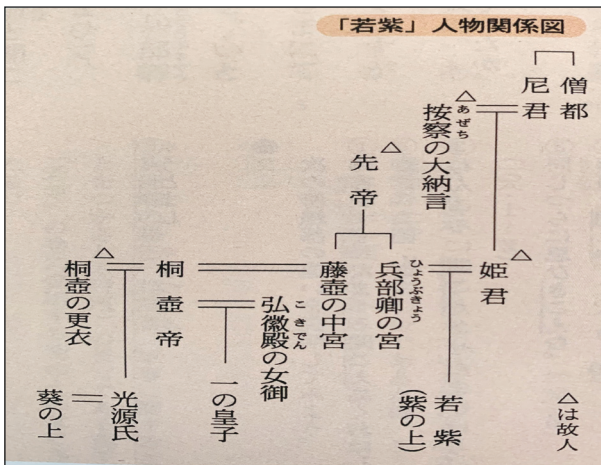


図2 「若紫」人物関係図

人物関係図は、若紫の母「故姫君」の出自を確認するために用いる。若紫の母は、故按察の大納言と尼君の娘

である。光源氏の母、桐壺更衣も同じ按察の大納言の位にあった人を父とする。原岡(2008)³²は、この相似から「桐壺」の物語が想起されるという。「紫の上の母と、光源氏の母、桐壺更衣との間には見事な符号があった。異なる点は、桐壺更衣が入内を果たしたのに対し、紫の上の母の場合は、入内は果たされず、やがてひっそりと結ばれたのが、帝ならぬ『宮』であったというだけのことである。」この「宮」兵部卿の宮が他ならぬ「藤壺の中宮」の兄であった。このことから、光源氏の幼少期の母や祖母との死別、その後宮中で「母なき子」としての成長、母の面影と似るといふ藤壺との出会いと憧れへといった、単なる父の後である人への思慕という説明だけでは理解できない内面世界に思いを巡らせる契機となればと考える。また、光源氏と若紫には、「母なき子」という共通項がある。若紫を二条院に引き取った後の光源氏の思いも物語全編を味わうためには読みたいところであるが、高等学校での古典の授業でと考えると時間的な制約もあり難しいかもしれない。光源氏と紫の上の物語として、第2部「御法」巻、「幻」巻を読む際には、「母なき子持たらむ心地して」(紅葉賀)の本文も絵とあわせて紹介したいところである。が、その詳細は稿を改めて述べることにしたい。

5.2 若紫巻「垣間見」場面で使用する源氏絵

大修館古典B教科書には掲載されていないが、源氏絵の中でも最も有名な土佐光吉筆を含む3枚の源氏絵を取り上げ、「若紫」垣間見場面の視点人物、敬語の有無、言葉、表現そのものに着目する「場」(プロセス)を生成する。これは、先に紹介した田中(1987)が、「生徒にも光源氏と同様に垣間見をさせたい」と述べたのと同様の思いがある。臨場感を持って、その場に居合わせ光源氏と同じ目線で少女を見、原文の言葉そのものに出会っていく、それを企図している。提示する3枚の源氏絵は次のものである³³。



図3 土佐光吉・長次郎「源氏物語画帖」

この絵(図3)は高校の国語教科書に挿絵として採録されることも多く、便覧等にも掲載されている。数ある源氏絵の中でも最も有名な1枚である。桃山時代の作品で、現在は京都国立博物館に所蔵されている。実際の大きさは縦25.7×横22.7(cm)で、以外と小さい。河添(2018)は、原文と絵の衣装を丁寧に比較して、図3は原文の衣装描写に忠実ではないと述べている。その背景には、光吉画帖の制作は、天皇家と近衛家の婚姻による結びつきを記念し祝福するためのものであり、詞書きの筆者たちの『源氏物語』の原文の読みと、嫁入道具としての画帖の衣装の図様が原文と一定していなくとも構わないという当時の認識を示しているのかも知れないと詳細に解き明かしている³⁴。このような衣装を中心に源氏絵の歴史をたどり、『源氏物語』の受容史を解き明かす古典文学研究の成果を、古典教育の場に取り入れ、学習者の古典ばなれ、古典への関心の薄さを軽減することができればと思う。

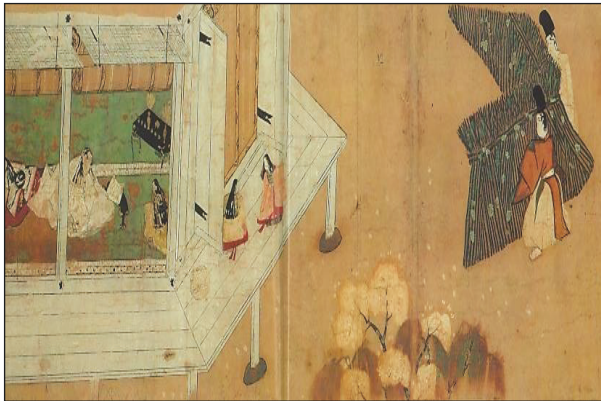


図4 天理図書館蔵「源氏物語絵巻」作者不明

この絵は、若紫をかいま見る直衣姿の光源氏を描いた鎌倉時代後期の作品であり、実際のサイズは、縦30.0×横901.0cmと横長のものである。図4は、横長の絵の中心部分を切り取ったものである。天理大学附属天理図書館蔵の「若紫」垣間見場面を描く、現存最古の作品であることも紹介する。「この絵の右側は、逃げた雀を犬君が指さし、その方向を茫然とながめる若紫、それを小柴垣の後ろから垣間見る光源氏と惟光が描かれている。一方、絵の左側はその後の場面を描き、雀が逃げたことを尼君に報告する若紫と、それをたしなめるかのように向き合う尼君、その背後に控える女房二人を描いている。つまり、この絵は右半分の雀が逃げた場面、左半分のその後の場面が一つに収まっている異時同図の絵なのである。」「天理図書館本を衣装描写の観点からみれば、若紫は山吹襲を着ており、尼君は尼衣装にふさわしい白い衣装で、光源氏も冬の白の直衣、惟光が赤の狩衣と、原文に沿った衣装描写になっている。」³⁵



図5 「源氏物語図屏風」伝狩野永徳

これは、伝狩野永徳の桃山時代の作品である。実際のサイズは縦167.8×横362.4cmである。屏風に描かれたものであり、宮内庁三の丸尚蔵館蔵である。これを取り上げたのは、土佐派と狩野派の画風の違いが一目瞭然であることと、屏風や扇子など様々なものに描かれていることを紹介する意図もある。

6 「見る」から「読む」へ、「読む」から「見る」へ —『源氏物語』の表現に出会う「場」をつくる—

授業では、5章で紹介した3枚の源氏絵を提示して、どれが一番有名な源氏絵だと思うかと極めておどろばな、一目みたときの感じ、直感での印象を尋ねることになっている。先行研究の知見をもとにした詳細な絵解きは、授業の導入では行わない。絵を見て直感で選ぶという誰でも参加できる学習の入り口を用意するためである。「古典はイヤだ、めんどくさい」と腰が引けた生徒を、なんとか「若紫」原文の読みに誘い込みたいという、その一心から考えたものである。

最初に絵を見つつ音読される原文に耳を傾け物語世界に浸るという当時の享受に近い形で源氏物語を楽しみたいと考えたのは、勤務校での共通教育(学部1年生の一般教養)の授業³⁶がきっかけである。2013年。教養教育での古典教育については、「学生達に古典の原文だけを読ませることの困難さ」(河添2006)、「古典の世界は敬して遠ざけるだけの人が多くなってきた」「古典を読むための動機づけや刺激が必要である」(三田村2006)など多くの課題が指摘されていた。また「大学教育を広く生涯学習の一つ」と捉え「中・高の教科書に掲載され、多くの学生が一度は学んだ古典について、実はこんな新鮮な見方ができるよ」という「古典再発見」が必要だという菊川(2007)の提案もあった。絵画でなくては語れないものと文字によって語るものを行き来して、源氏物語を読む楽しさを「再発見」することを第一の目的として始めた。純粋に楽しんで読むことを狙ったのである。

古典を学習者自らが発見する、古典を読む楽しさを

知って欲しいという願いは、小中高の古典授業であれ大学の講義であれ、筆者の根源に据わる最も切実な願望である。その楽しみの入口としての絵を「見る」である。

大学1年生の受講者例年70~80名のおおよそ8割が図3「源氏物語画帖」を選ぶ。それを受けて、この絵が数ある源氏絵の中で最も有名な絵であることを明かす。

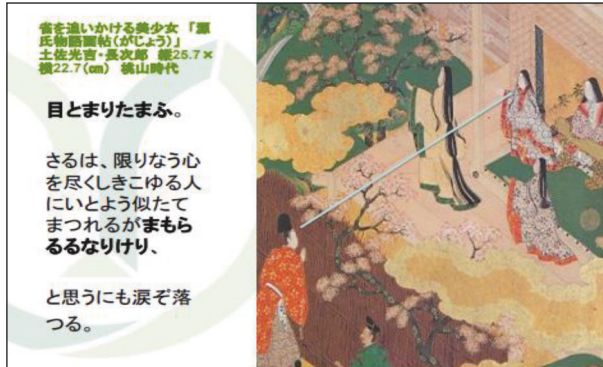


図6 大学1年の講義で用いたスライド

図6は、大学1年の講義で用いたスライドである。土佐光吉「源氏物語画帖」は、垣間見する光源氏の視線をたどると、少女の顔にびたりと焦点が合っている。少し前屈みになっている光源氏の背中中のラインと、やや上向きの横顔が「目とまりたまふ。」「まもらるるなりけり。」の原文と照らし合わせて読むと、まさに自分が光源氏その人になって、少女を垣間見しているような気持ちになる。

次に、「若紫」垣間見の最後の段落、原文を投影する。

つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざし、いみじうつくし。「ねびゆかむさまゆかしき人かな」と目とまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとよう似たてまつれるが、まもらるるなりけり。」と思ふにも涙ぞ落つる。

この段落を一行おきにノートに丁寧に視写をしてもらう。その後、筆者が音読をし、簡単な現代語訳をする。大学の講義では、スクリーンにパワーポイントのスライドを投影して説明する。

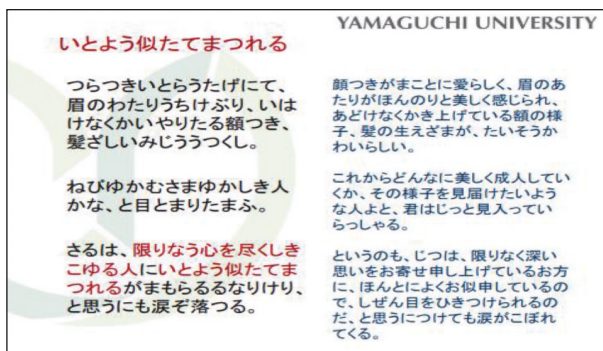


図7 講義で用いた原文と現代語訳のスライド

そして、「限りなう心を尽くしきこゆる人」は誰かと

尋ねる。前時までの講義を振り返りながら、学生たちは、藤壺であることを確認していく。「いとよう似たてまつれる」「おぼゆ」といった表現が『源氏物語』には随所で繰り返し使われていることと、「形代」というモチーフが全編を通して繰り返されていることを説明して、前回の「桐壺」巻に提示した原文を振り返るのである。

母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、「いとよう似たまへり。」と典侍の聞こえけるを、若き御心地に「いとあはれ。」と思ひきこえたまひて、常に参らまほしく、「なづさひ見たてまつらばや。」とおぼえたまふ。

「若紫」での「いとよう似たてまつれる」と桐壺巻の「母御息所の面影」（古典B教科書では、垣間見場面の直前の頁に採録）の「いとよう似たまへり。」に着目する。3歳で母を亡くし、母の面影さえ覚えていない光源氏が、母に似ている藤壺に好意を抱き、「なづさひ見たてまつらばや。」と願望していく心理を、単なる話の筋を追うというレベルではなく、理解してほしいのである。そうして始めて、本文の分析的な読みに入っていく。

植田（2003）、原岡（2008）がすでに提案する、助動詞や敬語、語り手、視点といった、現代文の読みにも通じる読みを学習者にも体験してもらえたらと考える。そのためには、あえて、部分の精細な読みをモデル的に提示して、読み方を教えるという方法を採用したのである。

「つらつきいとらうたげにて、～髪ざしいみじうつくし。」まで、光源氏の目は若紫の容貌を捉えて描き出している。原岡は「微細に対象をクローズアップするカメラのように」という。そして、「ねびゆかむさまゆかしき人かな」と目とまりたまふ。カギ括弧内が光源氏の心の内の言葉いわゆる心内語である。「かな」は詠嘆の終助詞という知識が、光源氏の心の声となって聞こえることに機能する喜びを味わえる。「目とまりたまふ。」と敬語を用いて記されるところで、「光源氏を外側から捉える語り手の存在が浮かび上がる。」敬語の学習が、読むことの面白さに繋がるのである。「さるは、～と思ふにも涙ぞ落つる。」は、原岡（2008）を引用する³⁷。

続いて、「さるは」（実は）と明かされたのは、「限りなう心を尽くしきこゆる人」（この上ない思慕をお寄せ申し上げているあの方。つまり藤壺）と、生き写しの面差しなので、この少女から目が離せなかったのだ、とはっと気づいて落涙する光源氏の胸の内だった。「まもらるるなりけり」とある。自発の助動詞「る」の連体形「るる」には、なぜか思わずじっと見つめてしまった、という彼のほとぼしる思いの深さが封じ込められ、「なりけり」には、はっとそのことを発見した驚きが託されるのであ

た。「と思ふにも涙ぞ落つる」の主語は、従つてもとより光源氏だが、ここに敬語が消える現象が目を引きく。

授業では、なぜ「思ふ」「涙ぞ落つる」と「思す」「たまふ」等の敬語が一切使われていないのか、と「問い」たい。これを練習課題として個人思考、グループでの話し合い短時間での発表を行う。その後、学習者自らが垣間見本文を読み解いていくのである。

植田(2003)は、「垣間見という行為そのものに気づかせるために、現代の高校生たちに馴染みの深いテレビなどの手法を媒介させる例もある。現代の表現手法を導入として、それと似通った手法が、古代の物語ではことばを駆使してとりこまれていることに気づかせる手引きである。」という。映画監督が、自在なアングルで場面を映し出すように、同じ手法を、源氏物語は、ことばで描き出している。光源氏のカメラアイとそれを外側から捉える語り手の存在によって、学習者自身がその場で光源氏となって垣間見しているかのように、臨場感を伴う読みを経験することができればと考える。本稿で用いた源氏絵は、現代の表現手法とは異なるが、全体を直観で捉えることを絵、視覚的資料は可能にする点では、植田がいうところの手引きとなっているのではないだろうか。

7. 広がり、深まり、繋がる「場」をつくる

4章でも述べたが、「垣間見」という男性主人公が恋物語をスタートさせるきっかけになる場面の設定は、『源氏物語』以前の物語にも見られ、また『源氏物語』の中にも十数例設定されている。多くの指摘がある『伊勢物語』「初段」との関わりを、垣間見からだけでなく、本稿では、少女の呼び名である「若紫」を手がかりに、和歌からも紐解いてみたい。

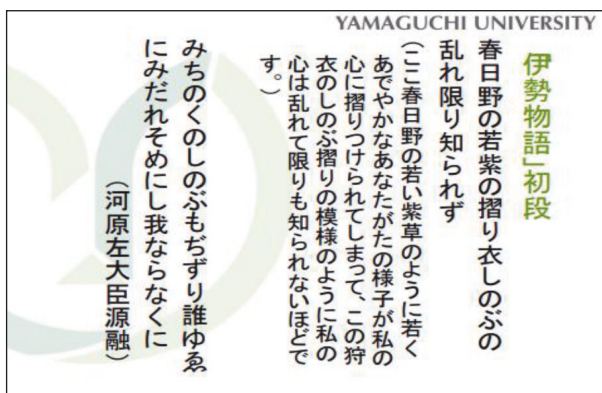


図8 伊勢物語「初段」の和歌(講義用スライド)

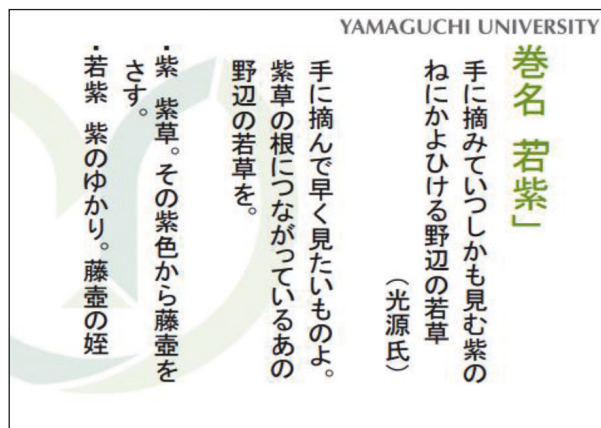


図9 光源氏の和歌(講義用スライド)

文学史の流れとしては、『古今集』をはじめとする和歌から歌物語『伊勢物語』へ、『竹取物語』をはじめとする伝奇物語と歌物語から和歌世界を内包した長編物語『源氏物語』へ、さらには古典和歌世界、物語世界を取り込んだ本歌取り、本説取りの技法が本格的になる『新古今和歌集』へという大きな流れがある。植田(2003)は、「文学史が、最初から歴然としてあるわけではない。ともすると、錯覚されがちなその事実を確認するよい機会として、垣間見という物語文学における重要な設定が共通する、定番教材を柔軟に関連させつつ利用してみるはどうか。(中略)『史』というのは後世からなされたひとつの整理にすぎず、その根ざすところは、さまざまな個別の作品に他ならない。古典文学の世界を、より生き生きと味わうために、北山での垣間見という定番教材だからこそ可能となる有効な活かし方を、懐深く考えてみるべきである。」³⁹と述べている。

『伊勢物語』初段の垣間見では、「女はらから」、つまり二人の女性を男が垣間見する。この設定に繋がるのは、「若紫」垣間見だけではない。宇治十帖の橋姫巻の垣間見も「女はらから」の変容とすることが可能である。「若紫」で光源氏が垣間見るのは、尼君と少女である。この特異性については3章ですでに述べたところである。原岡(2008)は、「『伊勢物語』から「若紫」へ、「パロディ」、「源泉」なるものと、そこからの離陸の仕掛けの一つの例である。そしれおそらく「パロディ」こそは、文学作品の根元の機構に繋がるものを負っている。源泉に魅せられ、模倣し、そしてそこから離陸することで作品は再生産を繰り返す。その意味で作品と作品とは、大きな繋がりの中にあると言って良い。」⁴⁰という。この大きな輪の繋がり具体的な姿が、新古今和歌集の本歌取り、本説取りであると筆者は捉えている。

広がり、深まり、繋がる「場」をつくることによって、学習者自身の現在や言語生活への繋がり実感されることもあるのではないか。その「場」を生成させること、方法こそ、古典の授業においては不可欠で、「場」があ

ることで、時には学習者個々の内面世界とも繋がる可能性が拓けるのではないだろうか。

例えば、先の『伊勢物語』初段の「春日野の」は、『古今集』の「みちのくの」を踏まえている。それを踏まえて「若紫」の巻名となる光源氏の「手に積みて」がある。「紫のねにかよひける」の「紫」（紫草）は、『万葉集』「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」「紫のほへる妹を憎くあらば人妻故に我れ恋ひめやも」を想起させる。個別から「史」へという流れをつくる「場」があれば、それら個々の知識の断片は、繋がり、現在の学習者にも繋がり得る流れとなるのではないだろうか。その「場」づくりのひとつとして、例えば図1で提示した地図等の活用を提案したいのである。

8. おわりに

どの校種の授業であれ、学ぶ楽しさを実感することで、真の自ら学ぶ、主体的な学びが始まる。学びの源泉ともなる、発見や驚き、喜び等の情意的な心の動きを伴った学びの場をつくりたい。古典ってやっぱりすごい、なかなかやると言わせたい。本研究を継続する理由である。

本稿では、高等学校古典教材の「定番中の定番」である『源氏物語』「若紫」を取り上げた。正直なところ、「定番教材」を学ぶのも、なかなか大変だと痛感した。受験という出口の制約は、やはり大きい。教えなければならないことの精選と責務は、大学の教養教育での比較的自由な授業づくりとは比べものにならないと痛感する。

それでも、先行研究を紐解きながら、受講者の顔を思い浮かべながら、筆者自身が「古典ってやっぱりすごい」と実感させられる。登場人物の視点と、語り手の視点のみごとに交錯させて、北山の垣間見場面はことばによって映像を映し出してくれた。情意的にも知的にも、古典を学ぶ、古典で学ぶ楽しさは限りなく広く深いと考える。

このような学びを自身が講義の中で生み出せているだろうか、という畏れを覚えつつ、本稿をまとめた。

広がり、深まり、繋がる「場」を視覚的資料に、ことばそのものに、その往還に見出しつつ、学び手の内面世界に、広がり、深まり、繋がる「場」が生成されることを求め続けようと思う。

<注>

- 1) 坂東智子 (2021) 「『見る』を含む学習の系統性 (3)―竹取物語「天の羽衣」―」『研究論叢』第70巻1号、山口大学教育学部、pp.127-136。
- 2) 管智子 (2017) 「高等学校国語教科書における『源氏物語』採録箇所の研究―桐壺巻・若紫巻採録

の適切さを中心として―」『日本文学ノート』52号、宮城学院女子大学日本文学会、pp.1-16。

- 3) 吉井美弥子 (2020) 「これからの文学教育」(特集 日本文学協会第74回大会 文学研究の部 文学教育の挑戦) 『日本文学』69(4)、日本文学協会、pp.2-11。吉井は、「皆が皆揃ってこの場面を学んでいるという状況こそおかしいのではないかという疑問を抱いた」と述べる。また、「定番教材からの脱却をはかるべきではないか」という高等学校での教材採択の問題をあげ、さらには古典教育そのものの意味、意義について再考している。
- 4) 大滝一登 (2018) 『高校国語 新学習指導要領をふまえた授業づくり 理論編』明治書院、pp.42-49。
- 5) 浜本純逸 (2011) 『国語科教育総論』溪水社、pp.52-57 (第四章 国語科で育てる学力-言語化能力の教育)。「私は、ソシユールのいうランゲージにこれからの国語科教育の根基となるものを見出したい。(「言語能力」という用語は、これまでにわが国の国語科教育界でさまざまな概念で使われてきたので、それから自由になるために、「言語化能力」という訳語を当てておく。)と説明されている。
- 6) 浜本純逸 (1996) 『国語科教育論』溪水社、pp.32-33。浜本純逸 (2004) 「国語教育・国語科教育」田近洵一他編『国語教育指導用語辞典第3版』教育出版、pp.256-257。
- 7) 町田守弘 (2005) 『声の復権と国語教育の活性化』明治図書、pp.131-133。
- 8) 鹿内信善 (2006) 「『見る』活動を取り入れた国語科授業づくりの可能性：絵図教材の創造的読み」『初等教育・教師教育研究』27、年報いわみざわ、pp.1-12。
- 9) 8)に同じ、pp.11-12を発表者がまとめた。
- 10) 奥泉(岩本)香ら (2004) 『絵を読み解く力』の育成：初等教育およびその教員養成課程を視座として」『千葉敬愛短期大学紀要』(26)、敬愛大学・千葉敬愛短期大学、pp.33-63等を基に、筆者が「見る」力に関係するキーワードを抽出し、「見る」と「見ること」レベル(試案)を作成したもの。拙稿「『見る』を含む学習の系統性(1)：漢字教材を中心に」(2019)山口大学教育学部研究論叢68巻、pp.181-189に詳細を所収。
- 11) 佐野みどり、三田村雅子、河添房江 (2006) 「描かれた源氏物語―復元模写を読み解く」所収：『描かれた源氏物語』、翰林書房、pp.8-9。
- 12) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(H28)。

- 13) 2) に同じ。
- 14) 2) に同じ、p.3。9社18冊の出版社、教科書番号、教科書名は次の通りである。①東京書籍 古典B301 新編古典B、②東京書籍 古典B302 精選古典B 古文編、③三省堂 古典B304 高等学校古典B、④三省堂 古典B306 精選古典B、⑤教育出版 古典B307 古典B 古文編、⑥教育出版 古典B309 新編 古典B 言葉の世界へ、⑦大修館書店 古典B310 古典B 古文編、⑧大修館書店 古典B312 精選古典B、⑨大修館書店 古典B313 新編古典B、⑩数研出版 古典B314 古典B 古文編、⑪明治書院 古典B316 精選古典B 古文編、⑫明治書院 古典B318 高等学校古典B、⑬筑摩書房 古典B320 古典B 古文編、⑭第一学習社 古典B328 高等学校 古典B、⑮第一学習社 古典B322 高等学校 古典B 古文編、⑯第一学習社 古典B324 高等学校 標準古典B、⑰桐原書店 古典B325 探求古典B 古文編、⑱桐原書店 古典B327 古典B。
- 15) 有馬義貴 (2006) 「高校「古典」における『源氏物語』採録箇所 の提案—「桐壺」冒頭と「若紫」垣間見場面との連結」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊13号-2、所収：『源氏物語続編の人間関係付 物語文学教材論』2014、新典社、pp.258-284。
- 16) 原岡文子 (2017) 「教科書の『源氏物語』「若紫」垣間見小考—教材化の史的変遷、そして史的文化的状況の中での受容」『愛知県立大学説林』(65)、愛知県立大学国文学会、pp.27-33。
- 17) 一色恵理 (2001) 『「源氏物語」教材化の調査研究』溪水社。
- 18) 田坂憲二 (2012) 「光源氏と若紫の少女との出会いをどう教えるか」『群馬県立女子大学国文学研究』。
- 19) 2) に同じ、pp.5-6。
- 20) 本文は、『新編日本古典文学全集』(小学館)に拠る。
- 21) 16) に同じ、p.31。
- 22) 吉井美弥子 (2014) 「国語教育を超えて」『早稲田大学国語教育研究』34巻、pp.76-81。
- 23) 久富木原玲 (2014) 「ブラジル・サンパウロ大学における学術交流記—若紫巻の「垣間見」—『源氏物語』の絵画を手がかりに—」『愛知県立大学日本文化学部論集』5巻、愛知県立大学国語国文学科編、pp.1-14。
- 24) 植田恭代 (2003) 「北山での垣間見」『<新しい作品論>へ、<新しい教材論>へ 古典編 文学研究と国語教育研究の交差』右文書院、pp.177-180。
- 25) 原岡文子 (2008) 『「源氏物語」に仕掛けられた謎「若紫」からのメッセージ』角川選書41、「第2章 垣間見をめぐる」pp.31-66。
- 26) 藤本宗利・角田智則・池田豊教 (2011) 「『伊勢物語』初段における構造的読解について—『源氏物語』若紫巻との対応を中心として—」『群馬大学教育実践研究』第28号、群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター、pp.335-342。
- 27) 田中博康 (1987) 「挿絵を生かした古文の学習指導—『源氏物語』「若紫」(垣間見の場面)の場合—」『研究紀要』(19) 大阪教育大学附属高等学校池田校舎、pp.13-25。
- 28) 河添房江 (2020) 「『源氏物語』で「深い学びは」いかにして可能か—桐壺巻・若紫巻における古典教育と研究の協働—」『中古文学』第106号、中古文学会、pp.38-49。
- 29) 松岡礼子 (2020) 「マルチモーダル・アプローチを活かした文学の学習指導」：第139回全国大学国語教育学会 秋期大会、課題研究発表 (ZOOMウェビナー) 国語教育の多相性③当日資料。
- 30) 朝日新聞社 (2011) 「平安京周辺図」『週間絵巻で楽しむ源氏物語五四帖 一帖桐壺』、p.40。
- 31) 大修館書店 (2014) 『古典B310 古典B 古文編』、p.110。
- 32) 25) に同じ、pp.75-81。
- 33) 30) に同じ。
- 34) 河添房江 (2018) 「源氏絵に描かれた衣装：院政期から近世まで」『比較日本学教育研究部門研究年報』(14)、お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所、pp.79-87。
- 35) 34) に同じ、p.82。
- 36) 坂東智子 (2014) 「教養教育における古典授業の開発(1)—7枚の源氏絵で読む源氏物語—」『語文と教育』第28号、鳴門教育大学国語教育学会、pp.73-84。
- 37) 25) に同じ、pp.50-51。
- 38) 24) に同じ、p.170。
- 39) 24) に同じ、p.180。
- 40) 25) に同じ、p.21。

【附記】

本稿は2019年度科学研究費補助金(基盤研究(B)) (研究代表者:守田庸一、課題番号19H01670)による研究成果の一部である。